青嶺 seirei

文責　田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

はたらく人プロジェクト in 青嶺校区開催！

去る一一月一五日、青嶺中体育館で小学校二校五・六年生と中学校全校生徒が一堂に会し、「はたらく人プロジェクトin青嶺中校区」が開催されました。三八もの団体や事業所から様々な職種の職業人の方々に集まっていただきその道のプロフェッショナルにしか語ることができない熱い話を聴くことができました。

めったにない本当に貴重な経験を通して、子どもたちそれぞれが「働く」ことの意味や意義について思いを新たにしたようです。将来の進路選択の参考になったと多くの感想がありました。

次年度以降も継続して行う予定にしています。参加して下さった方々には感謝しかありません。本当にありがとうございました。

プロの職業人と話して感じたこと・・・

はたらく人プロジェクトでは子どもたちもですが、我々職員にとっても大いに刺激を受ける取組となりました。

そこで心に残った話が二つあります。一つめは「寝る間も惜しんで仕事をした」という話です。今は「そこそこ」の給料で自分の時間がたくさんある、休日の多い会社を選ぶという風潮が見られます。そこからすれば正反対のことです。

しかしその方は「良いもの・お客様が喜んでくれるものを作るのは簡単ではなく、非常に手間がかかるし時間がかかる」と言われていました。そうでなければいい仕事ができないと。

本気である道を究めたいと思うならば、時間を忘れ寝食を忘れるくらい仕事に没頭し、技を磨く時期が必要なのだと思います。時間で自分の仕事を図ることだけが基準ではありません。今後向き合っていきたい言葉だと思いました。

もう一つは雑談の中での話です。校則の髪型についての話題の中で、サガン鳥栖は数年前までは茶髪禁止だったそうです。それが許されるようになって数年でＪ２への降格が決まりました。実はＪリーグの優勝争いをしているトップチームで「茶髪禁止」の決まりがあるチームが多数あるそうです。

その方は、「そういうことなんです」と言われました。以前陸上の選抜チームの練習会に参加した時、集合時にシャツを出していた選手に「帰りなさい」と指導者が言いました。「シャツを入れることはきついことではない。きつくないことすら頑張れない奴は、きついことは絶対に頑張れない」と自覚を促しました。サッカーでも恐らく、プレー以外のことに気を取られるようでは、チームのために頑張れないということなのでしょう。

いろいろな決まりやルールは「経験則」から導かれたものが多く、合理的ではないものに映るかもしれません。言葉に表しにくい非認知の概念ですが、先日の「対話の達人への道」の全校授業の中でのお題「制服・宿題はあった方がいいか／なくてもいいか」では、様々な立場で多面的・多角的に対話を進め、考えを深めていました。

時代にそぐわない校則があるならば十分に討議し対話を通して見直していけばいいですが、すべてが「合理的」には進まないのもまた事実です。その業界や学校で認められるラインがそれぞれ異なります。自分の夢・目標を達成するためには何を頑張るべきでしょうか？真剣に向き合ってみてください。

トルコ移民のおばあさんと

語学学校在学中ホームステイ先に新しい住人がやってきました。トルコ出身のチュネーツです。大柄でヒゲ面の彼は一見とっつきにくそうでしたが、話してみると穏やかで、とても優しい人でした。

生活に慣れるにつれ、彼には同じトルコ出身の仲間ができましたが「最初の友達だ」と言ってよく私を紹介してくれました。

私がバイクを探していることを知っていた彼は、仲間が持っているというバイクを紹介してくれました。家に行ってみると、まだ友達は帰っておらず、おばあさんと思われる人が出てきて、家に招き入れてくれました。

トルコから移民した一世だというその方は、こんな質問をしました。「オーストラリアは好き？」私はその時ちょっとした差別を立て続けに受けていたので、「大体は好きだけど、嫌いな人もいる」「どうして？」「人種や髪の毛の色で差別され、いやな思いをしたから」「私も嫌いな人がいるよ。移民した当時はみんな仲が良かった。でも英語を話せるかどうかや持っているお金の額でお互いに見下したり嫌ったりするようになった。だから今のシドニーはあまり好きじゃないね…」

黙って話を聞いていた時雨が降り始め、おばあさんは急いで干してある洗濯物を取り込もうとしました。足の不自由な彼女を私は手伝い、ほとんど全部とりこみました。その時「Good boy!」と言って優しく抱きしめてくれました。

移民した時同じ苦しみや喜びを共有したはずなのに、時が経ち様々な格差が生じ、同じ移民同士でも偏見や妬みが生じるようになってしまった。私と彼女は言葉では十分なコミュニケーションを取れませんでしたが、相手のために行動することで互いに通じ合えたのでした。あの時のぬくもりは今でも覚えています。

砂漠で転倒し、ケガをした仲間にも、見ず知らずのおばさんは同じように抱きしめてくれました。人を癒すのは人のぬくもりであり受け入れてもらえる安心感であり、それが本当のつながりだと思います。いつから人々の間に心の溝や隔たりが生じたのでしょう？なぜそうなってしまったのでしょう？金銭的な豊かさや才能があれば、それは幸せなのでしょうか？真に「人間らしく」「幸せに生きる」ために何を大切にするべきかを真剣に考えていきたいです。知らず知らずのうちに他者を見下したり妬んだりする道を進んでしまうかもしれません。「学ぶ」こと、「知る」こと、そしてしなやかに考え方を「更新する」こと。私はそれらのことを大事にしながら生きていきたいと改めて思いました。